月刊大阪弁護士会

OBAMJ

2023 January 1月

Opinion Slice　カンサイ建装工業株式会社 代表取締役
草刈 健太郎さんインタビュー

巻頭　福田 健次会長新春インタビュー

執行部特集
会員お役立ち情報　第6回
登録10年目までにしてよかったこと、しておくべきこと

新連載　誰でも使えるITツール

大阪弁護士会
Osaka Bar Association
since 1880

OPINION SLICE
オピニオン・スライス

カンサイ建装工業株式会社
代表取締役

草刈健太郎さん

KUSAKARI, kentaro

犯罪被害者家族という立場で、受刑者の出所後の就労支援を行う「日本財団職親プロジェクト」の創設メンバーとして活動する草刈健太郎氏。受刑者の社会復帰に向けて行政と民間を「つなぐ」役割の重要性、約10年間にわたり活動を行ってきた現在の心境などをお聞きしました。

日本財団職親プロジェクトとの出会い

── 草刈さんはカンサイ建装工業株式会社の代表取締役を務められる傍ら、受刑者や少年院在院者の社会復帰に力を注いでおられますね。

2013年に法務省、日本財団と私たち民間企業が協力して立ち上げた「職親プロジェクト」で、刑務所や少年院から出てきた人の就労と更生を支援しています。日本には、刑務所に入っている人が約５万人いて、その２人に１人が出所後に再び犯罪を起こすといわれています。塀の中で反省してやり直そうとしても、所持金が少ないために新たに部屋を借りるお金もなく、以前過ごしていた環境から抜け出せなかったり、働き口がない中で再び罪を犯してしまうことが多いのです。また、収入がないだけでなく、仕事を通じた社会とのつながりがない状態が、再犯に寄与しています。だから、彼らの住む場所と仕事の世話をし、再チャレンジと社会復帰の後押しをしています。私の家業は、88年目になる塗装業の「日之出塗装工業株式会社」と42年目になる建設業の「カンサイ建装工業株式会社」、あと人材派遣会社の３社です。これまで30人以上の元受刑者や少年院出院者を受け入れてきました。

── 草刈さんの著書「お前の親になったる」では、「職親プロジェクト」に加わられたきっかけがお好み焼きチェーン「千房」の当時社長中井政嗣さんからの誘いであると書いてありました。プロジェクトに加わられた当時、草刈さん自身はどのような状況だったのでしょうか？

2005年、私はアメリカに住む妹を犯罪で亡くしました。妹は私より７歳下で映画の仕事に憧れてアメリカへ渡り、制作所でインターンシップをしながら勉強していました。ところが、向こうで知り合い、結婚した男に殺されてしまったのです。大切な妹を殺された悲しみと怒りはとても言葉では表現できません。男は無罪を主張したので、日米を何度も行き来して裁判に臨むことになりました。精神的、肉体的な負担はとてつもないものでしたが、ようやく４年後に有罪が確定しました。しかし、それで妹が帰ってくるわけではありません。

千房の中井会長には、私が青年会議所のメンバーとして取り組んでいた東日本大震災の被災地支援で炊き出し支援をした時にお世話になっていたのですが、その中井会長

からお誘いを頂き、職親プロジェクトに加わることになりました。しかし、当然、私には「犯罪者を前に冷静でいられるだろうか」「なんで自分が？」という葛藤がありました。中井会長は私が犯罪被害者遺族であることをご存知ではなく、テレビ番組で職親プロジェクトのことが取り上げられ、妹の事件にまつわる映像を交えて私がプロジェクトで活動している様子にスポットがあてられたとき、中井会長は初めて私が犯罪被害者遺族であることをお知りになったようで、知らずにこのプロジェクトに誘ってしまい、辛い思いをさせて申し訳なかったと謝ってくださったのです。そのとき、私は「もし中井会長が事件のことをご存知だったら自分はプロジェクトに誘われず犯罪者を憎むことしか考えていなかったのではないか。しかし、このプロジェクトに加わることで加害者のことも考えられるようになっている、きっと妹が導いてくれたんだ」と思いました。刑務所視察をしたり、国の社会復帰プログラムを見ているうちに、被害者遺族である自分だからこそできる役割と責任があるのではないかと心に火がつきました。

―― 元受刑者や少年院出院者が職親プロジェクトを通じていろいろな企業に入られる経緯というのは、少年院や刑務所のほうからオファーがあるのでしょうか？

基本的にはハローワークが窓口です。ハローワークから刑務所や少年院に募集をかけ、それらの矯正施設内で会社説明会を行います。でも、結局応募につながらないことが多いです。少年院や刑務所に入っている今の子というのは、就職活動をやっているのを恰好悪いと思うんですね。だけど、刑務所を出た先を見据えたとき、大体60％ぐらいは就職できない。私は、加古川刑務所で４～５年ぐらい前から、出所、出院して働いている姿を具体的に想像できる職業体験プログラム、建築業の大人のキッザニアみたいなものもやっています。私たちも子どもの頃にスーパーの１日店員などの体験をして、具体的なイメージが湧いて、働くのって面白いなって思うじゃないですか。実際の現場の人間が刑務所に乗り込んで働く楽しさを教えてあげるのが大切ですね。

―― 実際に職業体験を通じて雇用されている方の成功例はありますか？

例えば今カンサイ建装工業で営業をしてくれている男性は、建築というのを全く知らなかったのが、職業体験で建築の楽しさに気付いたようです。当時40歳を超えて未経験だったのもあり、これから現場で職人として働くより総合建設業での勤務に魅力を感じていたようで採用に至りました。コミュニケーション能力もありました。結局、建設会社に入ったからにはやっぱり現場に出たいと言ったので、国家資格の２級施工管理技士の免許を取って２年ぐらい現場で勉強させて先行投資です。今は結果を出すために努力してくれているので、先行投資を回収している段階です。

元受刑者・少年院出院者に接してみて ～新たな試み公文式～

―― 元受刑者・少年院出院者本人の問題として社会復帰する上で支障となる最大の要因はなんだと思われますか？

９年前、加古川学園で講演してくれと依頼されました。少年の前で講演して、ブレーンストーミング形式で10人位と会話した時に気付いたのが、あまりにも基礎学力が不足していることでした。それには親の関わり方にも問題があったと思います。私達が社会人になった頃はちょうどバブルが崩壊して就職口もなく、両親が共働きをしないといけない世代でした。その傍ら、コンビニができたり、携帯電話が普及したりして、ある程度子どもをほったらかしても大丈夫な環境ができている、そのような状況に甘んじてほったらかしにされている子どもたちがいっぱいいるわけです。それにしても、「掛け算のみならず、足し算もできないのか」と基礎学力の低さに驚きました。

―― 基本的な計算力とか語彙力が不足しているということでしょうか？

そうです。例えば「金儲けしたいか？」「いくらくらい欲しい？」と聞くと、「金儲けしたいです」「年収800万円ぐらいあったらいい」といった答えが返ってきます。でも、掛け算もできない少年では到底無理ですよね。今、少年院に入所している相当数の子が境界知能なんです。境界知能の場合、知能指数

（IQ）が平均より低いけれど障害とは判定されず特にケアされないまま、小学校低学年ぐらいから授業についていけなくなり非行に走る子もいる。それならば、その躓き始めのところをどうにかできないかと思い、ずっと少年院で基礎教育ができる環境を作りたいなと思っていました。４年位前、たまたま職親プロジェクトの会議のリストを見たら公文教育研究会（KUMON）が参画してくれていたんです。「これだ！」と思い、基礎学力の向上を公文式を利用したSIB（ソーシャル・インパクト・ボンド）でやろうと思ったわけです。少年院から外に出たら勉強する機会もなくなります。だから、公文式に少年院の中で基礎学力を身につける学習支援を実施してほしいと掛け合い、３年かかってやっと実現に至りました。費用については私が全部工面してもいいから効果を見るために一度やってほしいと依頼して始まったのです。

―― 公文式学習の効果はありましたか？

その効果は目覚ましいものがあり、初めは足し算しかできなかった子が半年で因数分解までできるようになり、大学に行きたいと。公文の人が加古川学園は、世界で最も短期間で生徒が伸びた教室のひとつだと言っていました。基礎教育を受ける機会があるかないかの違いです。

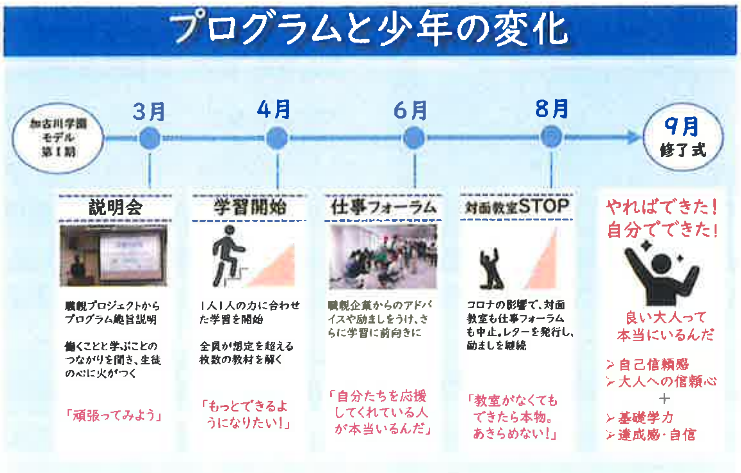
―― 何か取っかかりを見つけたら、ほかの勉強にも応用できますからね。

勉強は、自信、自己肯定感に繋がります。また、数学というのは頭を整理する能力ですし、国語は感情を整理する能力に繋がります。今の出所者・少年院出院者はコミュニケーション能力がすごく低いので、就職先でも喧嘩をしてやめちゃうんです。怒りを我慢できない。それは国語力の不足です。少年院では数学と国語の両方をやっています。両方とも小学生レベルから、一番うまくいった子は高校レベルまで行きました。

―― 国語力が低いと反省が進まないですよね。言葉を知らないと考えが深まらないと思います。

そういうことです。でも、そういう基礎知識を与えるのはやはり社会の役割だと思います。親が教育できなかったのならば、誰かがやらないといけない。思考力が足りないと善悪の判断ができないので勉強は必要、単純な話です。これから日本全国で刑務所内での公文式が広がると思います。殺人にしろ、それを犯したのが子どもであれ大人であれ、犯罪被害者にとっては一緒です。善悪の判断を親が教えられないのなら社会が教えないといけないし、そのような仕組みを作らないといけない。今はSNSの影響もあるだろうけど、子どもが育つ上では対面で「お前が

加古川学園で実施された職親プロジェクト公文式学習資料の一部



スローガン「成功への道〜やればできる!自分でできる!〜」

加古川学園で実施された職親プロジェクト公文式学習資料の一部

加古川学園で実施された職親プロジェクト公文式学習資料の一部

悪いんや、ぼけ」と怒ってくれるような学校の先生も必要なのに、誰もが萎縮している。そして、当の親が教育できない。子どもが学校の先生に怒られると、親が学校の先生を訴えると言い出すことも珍しくはありません。学校の先生が萎縮して子どもの心の教育ができなくなっている。そんな悪循環になっているんじゃないかと思います。

―― 草刈さんが大切と思われる心の教育とは？

愛情をもって接して成功体験を経験させることです。

昔、覚醒剤をやめられない子を引き受けたことがありました。愛情をもって接すると多少キツく叱ってもやっぱり伝わるものがあって、最終的には私を頼ってくるんです。私も覚醒剤を克服するには、どうするのが効果的なのか必死で色々調べました。そうすると、しっかり汗をかいてはミネラルを補給して、身体から薬物を排出することが大事だと知りました。簡単にいうとミネラルやマグネシウム、カルシウムといった体に必要な栄養素を摂取しながら発汗で代謝を促して薬物を体外に排出していく治療法です。それで、彼を沖縄の宮古島へ連れて行き、海の家で働かせてもらうことにしました。そうして、1年位真面目に働いたら、すっかり覚醒剤が抜けたようで、おまけに現地へアルバイトに来ていた女の子と結婚することまでできました。あと、どこまで守るものができるかです。別の子ですが、なかなか薬物を断ち切れない子がいて、半年ぐらい行方不明で連絡がなかったのに突然電話がかかってきて、「薬やめられました」と報告してきました。なんでも彼女ができて、日系ブラジル人のクリスチャンだったらしく、キリスト教に入信したのと同時に薬物を断ち切ることができたそうです。体格も良くなって、落ち着いて顔つきも全然変わっていましたね。だから、更生に一番つながるのは愛情を注ぐ相手がいるかです(笑)。

―― プロジェクトを通じて御社で雇用されている人たちは、基本的に若年層になるんですか？

30歳前後位が一番多いでしょうか。50歳以上は殆どいません。ただ、意外かもしれませんが高齢のほうが多分仕事への定着率は高いです。「Chance!!」という少年院・刑務所専用の求人誌があるんですが、そこにも若年層よりも40代、50代以上の人の定着率のほうが高いと書いてあります。思うに、高齢の方がやり直しが利かないから踏ん張りがきくのと、多少なりとも社会性も養われています。でも、10代、20代はまだまだ子どもで、仕事をさせる前提の社会常識や素地もなくて、「子育て」から入らなければなりません。そういう意味でも親がいない子たちの更生は難しいです。他人である私達がやれる限界というのもあります。親がいなくてずっと施設で育った子どもというのは、自己肯定感というのが育ちにくいように思います。

―― 施設で育っている若い人たちを受け入れることは職親プロジェクトではやっているのですか。

加古川学園にて公文式学習プロジェクトメンバーとの記念撮影

いいえ。加害者支援の一つなので、施設出身者ということではなく、刑務所や少年院に入った人が対象です。「こんな僕たちに一生懸命になってくれる大人にもっと早く出会っていたら僕はここにいなかっただろう」、逆に「これだけやってくれる大人がいるんだということを知って、今後ちょっと希望が見えてきた」ということを何人かの子が言ってくれ、そういう時にやっていて良かったと思います。

更生の難しさ

―― 人一人を更生させることが如何に大変かつくづく実感させられます。妹さんの事件では、仮釈放委員会に被害者家族として参加されていますね。受刑者の身柄を保釈して社会での更生を促す制度ですが、実際に参加されてどうでしたか？

この仮釈放委員会制度は日本にも導入するべきです。実際には、いくつもの質問を矢継ぎ早に考える隙を与えず繰り返します。どれだけ自分が今更生しているか、今後どれだけ実社会で社会生活を営んでいけるのかというのを、あらゆる方向性から質問していきます。矢継ぎ早に質問するので嘘を考える暇がないのです。私は、更生していない人間を社会に出してはいけないと思っています。更生しているか判断する上で、仮釈放委員会制度は有用です。

加害者支援が被害者支援を生む

―― 被害者家族でありながら加害者支援を行うモチベーションはなんですか？

妹を殺した犯人も今年で収監されて18年です。その間被害者家族は加害者をずっと思っているんですよ。加害者が外に出てきても被害者家族は何も得るものもないんです。だから、再犯を防ぐという方法で加害者支援はするんだけれども、それを被害者家族に還元できるような仕組みをつくりたいなと思っています。公文式でもそうですし、SIBという仕組みもそうです。

一般的な刑務所は、1,500人程度しか収容できないのに建物建築費だけで安くても700億円位かけていますから、億ションに住んでいるのと一緒です。さらに受刑者の生活費、刑務官の給与、メンテナンス、全部入れると、１人に年間約500万円かかっている。受刑者全体で５万人弱だとしたら2500億円かかっているんです。さらに、警察・検察・裁判費用にも税金が使われています。受刑者にかかっている税金を犯罪被害者に払えばいい。加害者支援が被害者支援になる、職親プロジェクトというのが認められる団体になるのはそこなのかなと僕は思っています。

―― 加害者支援と被害者支援は表裏一体なのですね。

私達は、加害者支援をしている反面、根本は被害者をつくらないためにやっているんです。もっと言えば、加害者支援が経済的利益を生むのであれば、将来的には被害者支援の資金に回したいと思っています。被害者家族に対する日本の経済的支援制度は全然駄目です。だって、一家の大黒柱を亡くしたら家族の生活が変わるわけじゃないですか。お金があっていい幼稚園に入れていたのに、大黒柱が殺されちゃうとお金がなくなるわけです。そうすると、生活スタイルが全部変わります。交通事故ならまだ保険金が出ますが、殺人事件では保険金は出ないですし、補償も僅かです。国民１人当たり換算で被害者に使われる予算を計算したところ、日本は６円とか数円単位

ですが、ドイツなんかは592円と約600倍も差があります。

また、2022年6月に懲役と禁固を廃止し一本化する「拘禁刑」が改正刑法で創設されることになりました。刑務作業が義務でなくなった分、再犯防止に向けた改善指導等に重点を置くことが可能になり更生を促しつつ、仕事につなげることができます。職親プロジェクトと親和性があると思って期待しています。

―― 更生に向けて、社会の一員として役に立っているという自覚も大切だと思います。

加古川刑務所では刑務作業で家具をつくっているんですけど、ただ、そこでつくる家具のセンスが良くない（笑）。だけど、いい腕を持っているんですよ。この間、高級家具を売っている道修町の店に入って、ある家具の値段を聞いたら500万円と言われました。じゃあ、この500万円の家具を加古川刑務所で作れるだろうかと聞いてもらったところ、可能との返事だったので、今、加古川刑務所で図面を引いて作ってもらっています。500万円の家具が50万円でできたらビジネスチャンスですよ。とにかくこの500万円する家具が幾らでできるのか一回挑戦してもらっています。市場ニーズとマッチして流通にのったら受刑者も嬉しいと思います。

―― 草刈さんの目線で市場ニーズと刑務作業が繋がれようとしているわけですね。

世の中のニーズに合わせるというのは大切です。やはり送り出すほうの責任もあると思います。日本では仮釈放委員会のような制度もないので、更生の素地もない元受刑者ばかり引き受けることになったら大変です。こちらは身元引受人になって居住の手配もして、なのに1週間もしないで辞めていく・・そういうことが続くと職親プロジェクト本来の意義も失われてしまいます。

「持続可能な成長を遂げていくために企業は何をすべきか」ということを、これ私の自慢じゃないんですけど、国連のSDGsの採択より先に考えていたんです。ステークホルダーとウィン・ウィンの関係、よくいう近江商人の売り手、買い手、世間よしの三方良しということです。下請業者、お客さん、利害関係者、そういうステークホルダー全てとウィン・ウィンにならないと企業というのは価値がない。それと違うことに手を出してしまうと失敗している事例があるんだけれども、それを真面目にやっている会社は絶対潰れない。それで2009年に100年企業を対象に、社会との共生を図っている要因、例えばサントリー、伊那食品工業、日本触媒、たねや、海外は、グラミン銀行、インタフェース社、アメリカンアパレル社を調査し分析しました。我が大阪のまちに拡めていきたい社会の共生を図る心が何か・・いわゆる今でいうサスティナビリティというものです。当時はそんな言葉はありませんでした。

弁護士へのメッセージ

―― 弁護士や専門家に対して期待するサポートはありますか。

いっぱいあります。私が所属する青年会議所でもロータリーでも弁護士さんがいますが、やっぱり実際に現場をみて社会に触れて社会のニーズを汲んで欲しいです。一面だけ見ていてはわからないことも多いですから。形だけの見せかけでない結果につながる「ほんまもん」のリーガルサービスをやってほしいですよね。

2022年(令和4年)10月17日(月)

［インタビュアー：澤上聡子
矢野智美］